

六十年代文学における アンティ・ニヒリズム⁽¹⁾

——レスコフの小説「行きづまり」について——

直野 敦

—

(47) 研究ノート

十九世紀六十年代から八十年代にかけてのロシア文学におけるアンティ・ニヒリスト小説の系譜は、「行きづまり」「いびがみ合い」のレスコフ、「悪霊」のドストエーフスキーのようにロシア十九世紀文学を代表する作家たちの作品から、今日ではこの分野の専門的研究において問題とされるにすぎない。B・M・マルケヴィチ、B・П・メシチェルスキー等の作品にいたるまでをふくむ。芸術作品としてはすでに読まれなくなった多くの作品をふくむとはいえ、ロシア文学の本質的な特徴の一つである、文学と革命運動との深い結びつきを屈折した形で表現しているこれらの作品を、一つの文学史的潮流としてとりあげた研究は、最近にいたるまでほとんどなかったと言える。ソヴェト・アカデミア版の文学史においても、アンティ・ニヒリスト小説については、六十年代文学の概観の項でわずかに六頁が割かれているだけである。⁽²⁾

しかし、アンティ・ニヒリスト小説は、六十年代における革命的民主主義派の文学者からナロードニキ作家にいたるまでの革命派の作家による新しい革命人間像の形象化、いわゆる「新しい人間」についての小説⁽³⁾の対極に立つものであり、十九世紀後半のロシア文学史の正確な全体像を得るためにも、またこの時代のロシア文学に特有の政治小説の系譜を客観的にとらえるためにも、より詳細な研究を必要とする分野である。

この意味で、一九六四年に発表された次の二つのアンティ・ニヒリスト小説研究は、これまでの欠陥を補うものとして貴重である。

(1) Charles A. Moser, *Anti-Nihilism in the Russian Novel of the 1860's*, Mouton & Co., The Hague.

(2) Академия наук СССР, Институт русской литературы, *История русского романа*, Том 2, гл. III, Анти-нигилистический роман (Ю. С. Сорокин), М.-Л., 1964.

モーザーの研究は、標題の示す通り六十年代から七十年代はじめまでのアンティ・ニヒリスト小説を対象とするもので、七十年代から八十年代のアンティ・ニヒリスト小説は考察の対象とされていない。その理由として著者は、七十二年以降のアンティ・ニヒリスト小説には、ツルゲーネフの「処女地」を除いては、作品として見るべきものがないことをあげている。

モーザーがツルゲーネフの作品、「父と子」、「処女地」などをアンティ・ニヒリスト小説にふくめている点に、この問題についてそのモーザーの理解と、ソヴェトの研究者におけるアン

テイ・ニヒリズム観との相違があらわれている。モーザーは、アンティ・ニヒリスト小説の作家の態度を、「急進派に対する中立的態度から激しい敵意にいたるまでをふくむもの」とし、「一般的に言って、ロシア文学においては、ある作家が、敵対的な、あるいは少なくとも中立的な観点から、一八六〇年代の急進派の運動に関連した主題や問題を論じるか、あるいは、この運動の参加者を描く場合に、アンティ・ニヒリズムの要素があらわれる」と述べている。しかし、「中立的態度」をとる作家、すなわち革命運動に対して客観的な立場からこれを描こうとした作家を「反」ニヒリスト作家にふくめるのは、アンティ・ニヒリズムという言葉の意味からしても問題であろう。このようにアンティ・ニヒリズムの概念を拡大するならば、チェルヌイシェフスキーからステブニャク・クラフチンスキーにいたるまでの革命派の作家のように革命運動の「内」からこれを描くのでなく、「外」からこの運動とその参加者の姿を描く場合に、その作家の革命運動に対する思想的立場の多様性を無視して、「中立的」から「敵対的」な思想に立つものをすべてアンティ・ニヒリズムの文学として規定することになる。事実、モーザーはツルゲーネフの「父と子」、「処女地」の二作品を典型的なアンティ・ニヒリスト小説としてあげているが、ツルゲーネフのこれらの作品をアンティ・ニヒリスト小説の系譜にふくめることは首肯し難い。たしかにツルゲーネフの作品には、革命的知識人と民衆の間の深い断絶、その他アンティ・ニヒリスト小説の好んでとりあげたテーマと共通の要素が見られる。

しかし、ツルゲーネフのニヒリスト描写は、自由主義的な世界観に立って、六、七十年代の革命運動とその参加者の姿を客観的に描き、新しいタイプの人間像を文学的に結晶させようとする基本的な態度に支えられており、アンティ・ニヒリスト小説におけるように、革命運動の意味を否定し、その諷刺、戯画的描写を目的とするものではなかった。「父と子」および「処女地」が、左右両派の批評家から激しい非難をうけると同時に、一部では積極的評価もつけたという事実は、このことを物語っている。

アンティ・ニヒリスト小説は、同時代の西ヨーロッパおよびロシアの革命思想、革命運動に対して敵対的な政治観、社会観を前提とするものであり、六十年代および七十年代のロシアにおける革命運動をロシアの現実から遊離した、ロシア国民の利益に反する社会運動として、また革命家の姿を悪漢、犯罪者、冒険主義者、時局便乗主義者の群や彼等に踊らされ、操られる犠牲者として歪曲された姿で描くことを主要な内容とする小説であると考えるべきであろう。また、文学的技法の上では、アンティ・ニヒリスト小説は、同時代の革命運動の諸事件や人物を作品の中に描きこむジャーナリスティックな政治小説の手法をとっている。したがって、たとえ同時代の社会的現実を作品の素材としてとりあげ、革命運動や革命家の姿を批判的に描いた作品であっても、それが以上のような中心的なテーマ、思想的内容、文学的手法を特徴とするものでない限り、これをアンティ・ニヒリスト小説として考えるべきではないと思われる。

ツルゲーネフの作品について言えることは、モーザーによつてアンティ・ニヒリスト小説とされるビーセムスキーの「渦の中で」についても言える。六十年代の革命派との論戦の中でビーセムスキーは最初のアンティ・ニヒリスト小説「荒れ騒ぐ海」を発表したが、それ以後の思想的变化とリアリスト作家としての成熟に基づいて「四十年代の人々」を書き、六十年代の革命思想の社会的必然性についての理解を示し、さらにニヒリストの人間像の再評価ともいえる「渦の中で」を発表した。この最後の作品においては、主人公である二人のニヒリストの運命は悲劇的な結末をつげるが、批判の矢は主人公をとりまくロシアの貴族社会に向けられており、革命運動やニヒリストの断罪が作品のテーマではない。モーザーもこのことは認めざるを得ないので、『渦の中で』は、作者の同情が急進派の側にあるところのニヒリスト小説と、作者のアプローチが基本的にその逆であるところのアンティ・ニヒリスト小説との間の境界線に近づいている」と断っている。

このようなアンティ・ニヒリズムの意味の拡大解釈は、アンティ・ニヒリズム文学がロシア十九世紀文学の中で占める意義を過大評価し、ロシア・リアリズム文学や自然主義文学などとの相互関係、相互影響の認識をあまりせざる結果になる。そしてこのことは、文学作品を機械的に社会的現実の反映として社会学的な態度で解釈するモーザーの非歴史的な研究方法にその原因があると思われる。

アンティ・ニヒリスト小説は、古いタイプの冒険小説的要素

の導入や犯罪小説への傾斜に見られるように、すでに四十年代に確立したロシア・リアリズム文学とはある意味で逆行しながら発展した文学史的現象であり、これをロシア・リアリズム文学の本流と混同することは誤りであろう。

もちろん、同時代の散文芸術としてアンティ・ニヒリスト小説とリアリズム小説との間に相互影響、相互滲透が認められることは当然であり、たとえば、ゴンチャロフの「断崖」はその後半の部分でアンティ・ニヒリスト小説に接近する形式をとり、他方、ビーセムスキーの「荒れ騒ぐ海」の前半、レスコフの「行きづまり」の第一部は、リアリズム社会小説としての要素を多分にふくんでいる。このような相互影響の問題を解明するためにも、アンティ・ニヒリスト小説の歴史的性格のより深い理解が要求される。

アンティ・ニヒリスト小説は約二十年にわたる文学史的現象であるが、この文学的潮流に内在する矛盾、すなわち十九世紀ロシアの現実にとって本質的な契機である革命運動とその参加者を描くことを主要な内容としながら、それをロシア社会の発展にとって外在的、一時的な現象、「鬱気楼」として描くという矛盾が、次第にこのアンティ・ニヒリスト小説の非リアリズムの傾向を助長し、保守的な商業ジャーナリズムに迎合する風俗小説への転化をもたらすことになる。モーザーの研究にはこのような歴史的展望が欠けているために、七十年代以降のアンティ・ニヒリスト小説に芸術的に価値の高いものが存在しないことの原因も究明されないままに残る。

以上のような点でモーザーの研究には本質的な制約があるけれども、文学に反映されたニヒリストの思想と行動、およびアンティ・ニヒリスト小説に対する同時代の文学批評の詳細な記述は、六十年代文学の研究にとっての貴重な貢献である。

他方、ソーキンの研究は、時代的には六十年代から八十年代にかけてのアンティ・ニヒリスト小説の全体的展望であるが、特に文学的形式の上でのこの潮流の特色にふれている点で教えられるところが多い。

* * *

この研究ノートにおいては、初期のアンティ・ニヒリスト小説に属するレスコフの「行きづまり」を考察することによってアンティ・ニヒリズム文学の特徴を検討することにする。

(1) Академия наук СССР, Институт русской литературы, Истории русской литературы, Том VII, Часть 1, Литература шестидесятих годов, стр. 295—301.

(2) ロシア文学史、批評史において「新しい人間」は社会的、思想的に明確に規定された人間像を意味している。すなわち、六十年代における雑階級出身の知識人、革命家を指し、また「新しい人間」についての小説は、これらの知識人や革命家を積極的主人公として描いたチェルヌイシェフスキー、ホミャロフスキー、スレプツォフ等の作品を指す。

(3) Charles A. Moser, op. cit., p. 61.

(4) *Ibid.*, p. 61.

(5) 「処女地」については金子幸彦「処女地論」(一橋大学研究年報『社会学研究』2, 一四五—二二四頁)参照。

(6) Charles A. Moser, op. cit., pp. 65—66.

二

アンティ・ニヒリスト小説には、しばしば同時代の革命運動およびそれをめぐる現実の中で世論の注目をあびた諸事件が十分な芸術的結晶化をうけることなくそのまま作品の中に持ちこまれて、ニヒリスト攻撃の素材とされている。ピーセムスキーの「荒れ騒ぐ海」における六十二年のペテルブルク大火、レスコフの「行きづまり」におけるスレプツォフのコミューン、ドストエーフスキーの「悪霊」におけるネチャエフ事件等は、その典型的な例であろう。レスコフの「行きづまり」においては、この傾向が極端に押し進められて、主要な登場人物のほとんどすべてが実在の作家や社会活動家をモデルとしている。そして一面的に理想化される(ライネル、リーザ)か戯画化されて(バルホメンコ、ペロヤールツェフ)いる。そして、そこに作者レスコフの主観が強く働くために、六十年代におけるロシア社会の直面する諸問題の内面的把握と深部からの描写という点で、この小説の芸術的形象化には否定的に作用している。ピーセムスキーの「荒れ騒ぐ海」においても、また「行きづまり」においても、六十年代の地方都市や農村の社会の描写が中心となっている小説の書き出しの部分には、まだ保たれている

客観的描写が、作者の論争的態度が強まるにつれて背景へ押しやられて、ニヒリスト人間像の戯画化が正面に出て来る。

このような芸術的形象化に表現された作者の態度、またそこから来るジャーナリスティックな手法は、次のような二つの面で作品の文体の上にも表現されている。

一つは、作者自身が小説の中に介入して自己の思想を直接読者に伝達するという方法である。「荒れ騒ぐ海」においては、作家としてのピーセムスキー自身が小説の主人公の一人として登場し、意見を述べる。「行きづまり」においては、作者はロシヤの社会的発展についての自己の見解を評論風に作品の中で展開する上に、医師ローザノフの発言を通じて自分の考えを主張し、ニヒリストと論争させている。

第二に、以上のことと密接に関連して、作品の中で、社会発展の問題について、結婚、愛情、家族、革命等々について、急進派のニヒリスト、自由主義者、現実主義者のあいだにたえず議論がたたかわされる。そのこと自体は一九世紀ロシヤ文学に共通の現象であって、この時代の直面する問題に正面からとりくんだロシヤ作家たちに多かれ少なかれ共通する手法である。ただ、ピーセムスキーにおいても、レスコフにおいても、ニヒリストの戯画的描写が中心となり、革命運動に對置される作家の積極的理念が明確さを欠いているために、これらの議論は作品の思想性を深める方向には働いていない。

レスコフの「行きづまり」は、このような文体的特徴を持ちながら、ニヒリストの芸術的形象化を行っているが、その場合

ニヒリスト批判を通じて作家はどのような新しい理想を読者の前に提示しようとしたのか、ということが問題になる。六十年代文学における革命派の文学、とくにチエルヌイ・スキエフの「何をなすべきか」に描かれた「新しい人々」の人間像がレスコフにとって否定すべきものであるならば、それに代る人間の理想をレスコフは何に見ようとしたのか、レスコフのニヒリスト形象化とニヒリストに對立する人間像の形象化を通じてこの問題を考察することにする。

後期のアンティ・ニヒリスト小説においては、劇的葛藤は、犯罪者、ベテン師の群からなるニヒリストのグループと、秩序の擁護者との間の闘い、善と悪の二つの勢力のあいだの闘いという単純化された図式に還元され、冒険小説、犯罪小説の要素が強まり、そのことによってアンティ・ニヒリスト小説は文学的に自壊作用をとげることについてはすでに述べた。同時にアンティ・ニヒリスト小説が次のような物語の構成をとる場合もあった。ニヒリスト内部に陰謀家、小兒病的革命家、犯罪者などの否定的な人間像と、他方、旧社会の秩序の打倒と社会変革をめざして革命運動に参加した理想主義者タイプのニヒリスト人間像を描きわけ、後者が前者の犠牲となって悲劇的な運命に追いこまれ、破滅するか、あるいは作者の理想を体現した積極的主人公がこの「迷える羊」たちを救済するという構成である。

「行きづまり」はこの後者のタイプのアンティ・ニヒリスト小説であり、誠実なニヒリスト、ライネルとリーザの悲劇的な

死によって物語は終りをつける。

しかし、このタイプのアンティ・ニヒリスト小説においては、犠牲者の人間像の描き方によってある種の矛盾が生じて来る。

すなわち、このような犠牲者の革命運動への参加を進歩思想の流行にまきこまれた純粹に外面的なものとして描けば、それだけ犠牲者としての意味は弱められ、その悲劇性は稀薄になる。

もし運動の犠牲者における革命思想を内面的に必然性をもつものとして描くならば、その悲劇的性格は深められるが、同時に、革命思想そのものが誠実な人間を惹きつけ、その人間たちの生活の信条となるだけの内容を持ち、社会的にも必然性を持っていたことを認めることになり、それは、アンティ・ニヒリスト小説の思想的基礎とは矛盾することになる。「行きづまり」においては、明らかにこのような矛盾が見られる。小説の第一部においては、レスコフは革命運動およびその推進者となった雑階級知識人の形成についての自分の見解を述べた後で、このような運動の成立する社会的必然性にある程度の理解を示しており、この運動が拡大する過程でその中に多くの不純分子、「ペテン師や馬鹿者」たちが入りこんで来たのである、という意見を述べている。

しかし、このような理解は小説の第二部、第三部では影をひそめ、モスクワが炎に包まれて燃え上る情景を夢みるアラローフ、全国で何百万の人間を虐殺してもいいと主張するブイテコフ、個人的権勢欲からコミューンを組織するペロヤールツェフ、婦人解放の理論をかかげて無知な娘を誘惑するクライン等、

まさに「ペテン師や馬鹿者」のみをニヒリストの代表として描き、他方、この運動に失望して破滅するライネルやリーザの姿に革命運動の犠牲者の姿を描くことに終っている。そしてレスコフは、六十年代の革命思想がロンドンの煽動家グループブルツェン等一の現実無視の「空論」を輸入した流行現象に過ぎないという考えに移行している。このことは、「行きづまり」創作の時代に、六十年代の激動する社会状況の中でレスコフ自身が革命運動に対する態度においてはげしい動揺を体験していたことを物語っている。そのような思想的動揺は、ニヒリストに対立する人間像の形象化にもあらわれている。

モーザーは、アンティ・ニヒリスト小説のニヒリスト形象化に反映された作者の思想を単純にアンティ・ニヒリズムの思想としてとらえているだけであるが、政治小説としてのアンティ・ニヒリスト小説においては、作者がニヒリストに対立するものとして描く積極的主人公の中に作家の社会観、政治観が端的に示されるのであるから、その意味でのアンティ・ニヒリズムの積極的な意味内容と各作家におけるその特徴が考察の対象とされるべきであろう。

レスコフにおいては、後期のアンティ・ニヒリスト小説におけるようにツァーリズム擁護の官制的イデオロギーの体現者が、積極的の主人公として描かれてはいない。

ニヒリストに対立する主人公としては、革命運動に参加した後これに幻滅を感じて革命家たちと決裂し、急進派に「漸進主義者」と批判される医師ローザノフ、リーザの女学校時代の友

人で、後に小学校教師のヴァズミチーノフと結婚し、家庭の幸福に生活の理想を見出すジュニがいる。二人の現実主義的人生観をニヒリストの過激で小児病的な態度に対比させることによって、作者が肯定的に描こうとしたのは、地道で平凡な生活者の人間像である。しかし、このような「平凡人」の現実主義、社会の片隅の平和をニヒリストの理想に對置させて事おわれりとするには、同時代の社会状況は余りにも激烈な矛盾に色どられており、その中で単なる現実肯定の思想は、そのまま体制維持のイデオロギーへ転化する可能性を持っていた。しかし、少なくとも「行きづまり」においては、そのような結論は与えられず、この作品には後のアンティ・ニヒリスト小説の主人公のような体制擁護者は登場しない。それだけでなく、青年時代の進歩派ヴァズミチーノフが転向して、官吏となり立身出世の道(3)を歩む姿は、妻のジュニの目を通じて批判的に描かれてきている。ここには、六十年代においてツァーリズム反対派から急

速に体制維持の立場へ転向をなしたロシヤ自由主義の人間像に對する批判がこめられていると言える。したがって、ローザノフやジュニの現実主義は、政治思想、社会観における現実肯定の思想ではなく、人間の個人生活にかかわる倫理的なもの、個人道徳にかかわるものである。

しかし、それではアンティ・ニヒリスト小説における社会的理想像が欠除することになり、ニヒリストの革命思想にかわるべき新しい社会像は示されないことになる。「行きづまり」においてレスコフがこの問題にどのような解決を与えているか、ということが次に考察の対象とされねばならない。(未完)

(1) Н. С. Лесков, Собрание сочинений М., 1956, Том 2, стр. 136—137.

(2) Н. С. Лесков, Там же, стр. 565—566.

(一橋大学講師)